

愛媛県におけるサトイモ品種開発と普及について



- 1 愛媛県でのサトイモ歴史と品種
- 2 愛媛県のサトイモ生産の状況
- 3 愛媛農試V2号の誕生
- 4 媛かぐやの誕生
- 5 省力栽培技術の開発と乗用農機利用

愛媛県農林水産研究所 農業研究部
浅海 英記



1 愛媛県でのサトイモ歴史と品種

- 1625年：宇摩郡内六ヶ村分納芋請撮書付
(松山藩士足立半右衛門が旧土居村の加地家に出した書面)
 - 1629～1654年：清良記 (旧三間大森城主土居清良が編纂した農書)
 - 1900年代半ば：旧土居村、新居地域の産物として紹介
 - 〃 ：大洲地方のいも炊きが始まる
- 【正岡子規の歌：武蔵野に秋風吹けば故里の新居の郡の芋をしぞ思ふ】

四
国
中
央
市

- 明治時代：青紫イモ、真イモ (晩生種)
- 大正時代：青軸、赤芽、深イモ、金イモ
- 大正～昭和初期：石川早生、愛媛早生、セレベス
- 昭和18年頃：旧寒川村の木下寿夫 (農業技術員) が女早生を鳥取県から導入
- 昭和30年頃～：「女早生」が適品種として急速に拡大
- 「女早生」の葉は、水平葉であり、やまじ風に対して被害が少ない。

大
洲
市

- 「女早生」、「石川早生」、「赤芽」の他に地域性の高い品種「おおどイモ」 (「女イモ」の仲間に近いと考えられる親いも用品種) が栽培

1 愛媛県でのサトイモ歴史と品種

子・孫いも用

愛媛農試V2号



石川早生



1 愛媛県でのサトイモ歴史と品種

親・子いも用

赤芽（芽赤、セレベス）



唐芋（えび芋）



八ッ頭



1 愛媛県でのサトイモ歴史と品種

親いも用

媛かぐや

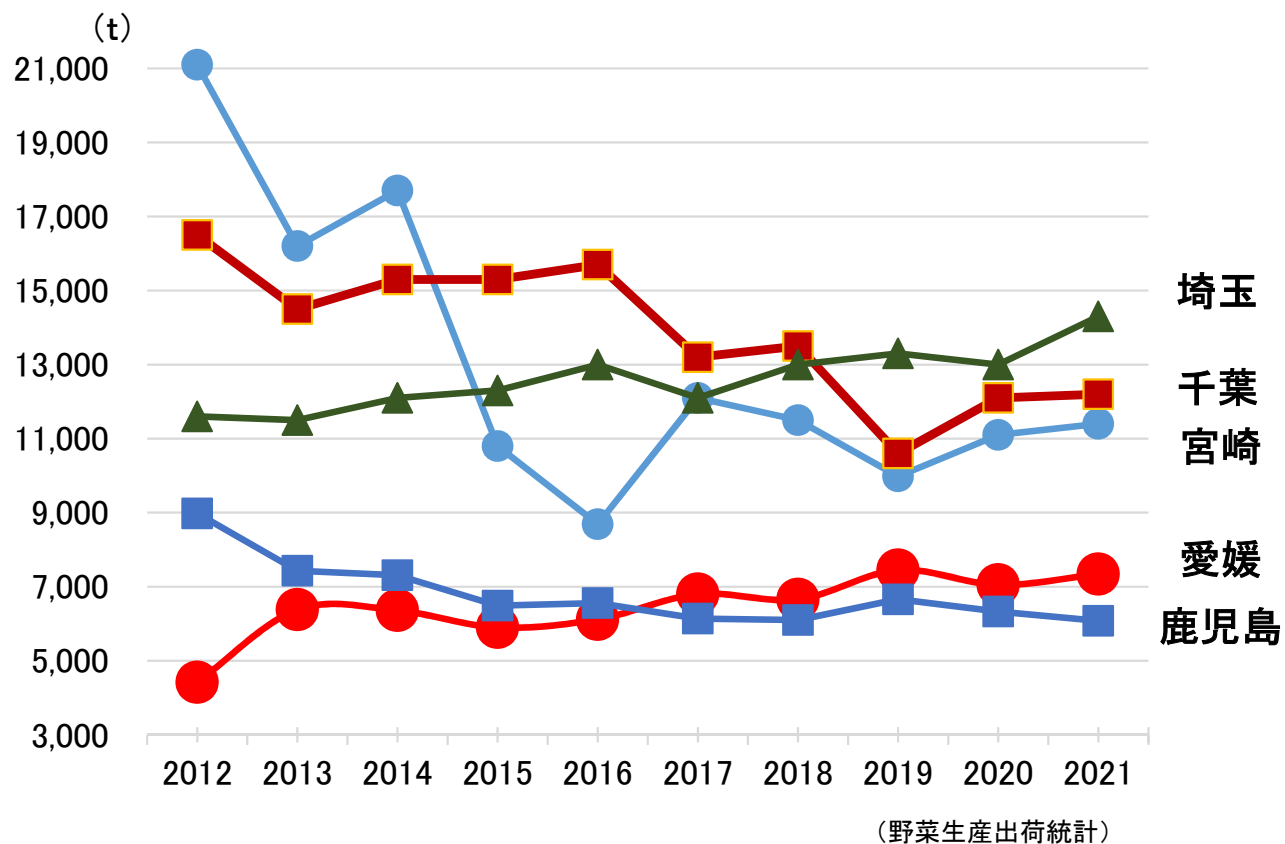


葉柄用



ずいき
(唐芋、ハッ頭、蓮芋等)

2 愛媛県のサトイモ生産の状況



主要県の出荷量の推移

○出荷量全国4位

※ 1位：埼玉、2位：千葉、3位：宮崎、4位：愛媛



今後も水田農業の高収益作物として
全県で更なる拡大の見込み

3 愛媛農試V2号の誕生

育成の経緯

- 1985年 サトイモ育種の本格開始
- 1988年 カルス培養による個体育成の実験系を確立
- 1991年 ‘女早生’のカルス培養により優良系統「No.51」を育成
- 1994年 ‘女早生’からカルス培養で個体を作成
- 1995年 圃場に定植し選抜を開始
- 1996年 2次選抜で、78系統から10系統
- 1997年 3次選抜で、10系統から5系統
- 1998年 5系統から、‘H7-062’を優良系統として選抜
- 1999年～ 特性調査及び現地適応性試験（四国中央市等）
- 2000年 ‘H7-062’を‘サトイモ愛媛1号’と命名
- 2001年 現地での普及に向けた増殖を計画と品種登録可否の再調査
- 2004年 ‘愛媛農試V2号’として品種登録申請
- 2006年 販売開始（JA：伊予美人）
- 2008年 品種登録（登録番号：第16024号）

3 愛媛農試V2号の誕生



- ・芋の着生は分生。
- ・みの毛はやや少ない。
- ・子芋、孫芋を食用とし、
繊維質は少なく、肉質は粘性である。

- ・親芋の形は球、子芋の形は短えび
で大きい。孫芋の形は丸くて、とても
大きい。
- ・根の着色はない。

4 媛かぐやの誕生

育成の経緯

- 1993年 ジベレリン処理により強制開花させた‘筍芋’に‘唐芋’を人工交配、胚培養を利用して試験管内で、再分化個体を作成
- 1994年 圃場に定植し選抜を開始
- 1995年～ 系統選抜
- 1999年 3系統を選抜
- 2000年～ 生産力検定
- 2001年 ‘T2’を‘サトイモ愛媛3号’と命名
- 2002年～ 特性調査及び現地適応背試験に供試
- 2007年 ‘媛かぐや’として品種登録申請
- 2010年 品種登録（登録番号：第19379号）

筍芋



媛かぐや



唐芋



4 暖かぐやの誕生



- 草姿は立性で、草丈は、「筍芋」と同様。
- 葉柄頸部、基部ともに赤く着色し、葉柄の屈曲程度や葉縁が波打たない点は「唐芋」と同様。

4 暖かぐやの誕生

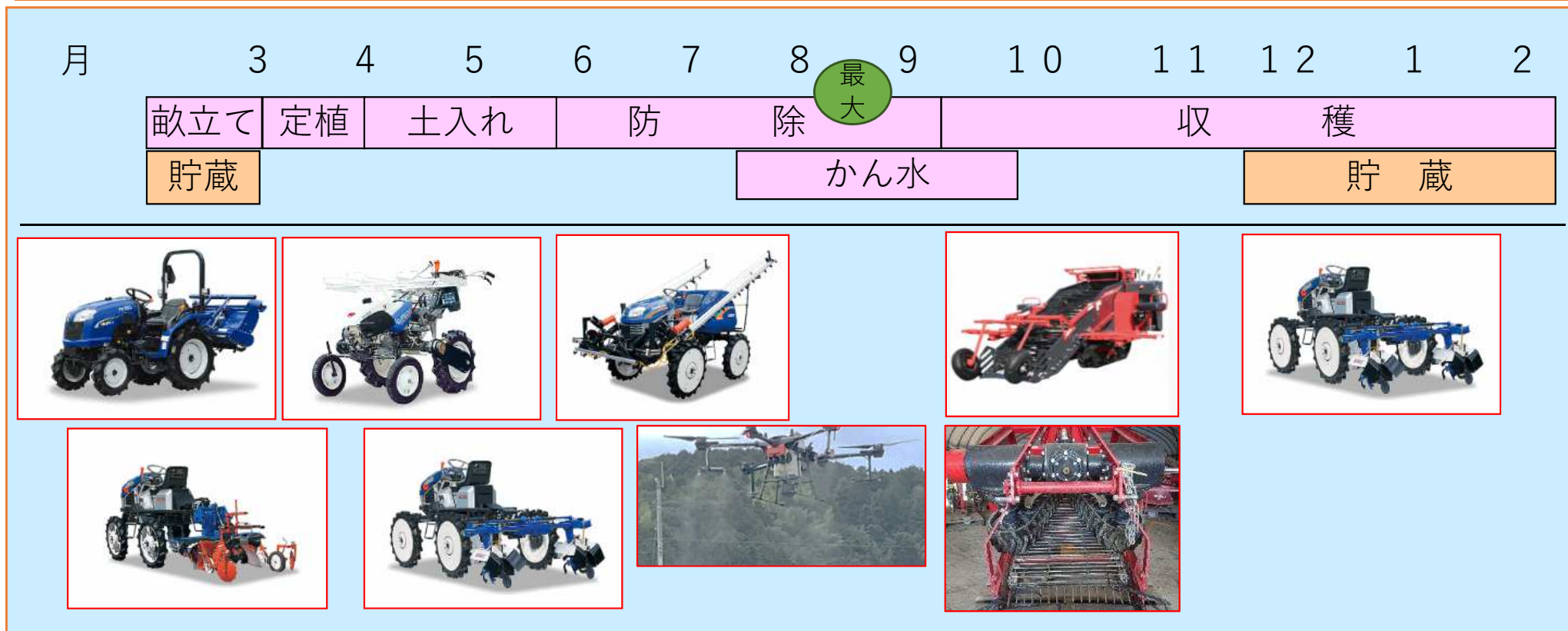


- ・ 親芋：形状は紡錘形、芋重は約1.4 kgで「筍芋」より約50%大きい。
- ・ 子芋：形状は紡錘形、芋重は約170 gで「筍芋」より約50%大きく、商品性が高い。
着生数は約30%少ない。
- ・ 孫芋：形状は長形、着生数が少ない。

4 媛かぐやの誕生

	媛かぐや	愛媛農試V2号
食用部位	親芋	子芋、孫芋
収穫時期	11～12月	9～4月
芋形状	砲弾型	丸型
肉質	粉質(甘味)	粘質
肉色	灰色	白色
葉柄	食用可	食用不可
お奨めの調理法	炊き合わせ おでん 揚げ物 スイーツ	芋炊き グラタン 煮っころがし
推進方針	期間限定特産品 加工品	産地戦略品目

5 省力栽培技術の開発と乗用農機利用



最新の台形畝



ハイクリ農機による土入れ



ハイクリブームでの防除

5 省力栽培技術の開発と乗用農機利用



防除風景

○乗用管理機の利用（防除作業）

乗用管理機の走行の有無による1株あたり収量の差（11月中旬）

試験区		親芋重 (g)	子芋		孫芋		子・孫 芋重(g)
			数 (個)	重量 (g)	数 (個)	重量 (g)	
A 圃場	走行有り	502	7.7	869	20.7	1,348	2,217
	走行無し	652	7.0	862	27.3	1,407	2,269
B 圃場	走行有り	500	7.5	557	28.3	1,260	1,817
	走行無し	605	8.5	810	32.0	1,535	2,345
C 圃場	走行有り	792	6.6	783	16.4	1,260	2,043
	走行無し	702	8.4	902	16.6	853	1,755
農水研	走行有り	446	7.7	641	16	1,207	1,848
	走行無し	544	7.6	718	16.3	1,422	2,140

※走行有り：ハイクリ乗用管理機が跨いだ畝

防除時期：A 圃場：7月24、29日、9月1日、B 圃場：8月12、31日

C 圃場：8月4日、農水研：7月27日、8月25日

乗用管理機の走行による収量への大きな影響は認められなかったことから、有効な省力化技術として引続き技術移転中。

5 省力栽培技術の開発と乗用農機利用

○全期マルチ栽培における「生分解性マルチ」の必要性

県内ではサトイモの全期マルチ栽培が定着しており、生産者のほとんどがビニールマルチを使用している。しかし、ビニールマルチは、土壌中や自然界に長く残存するため収穫時に除去し、産業廃棄物として処理しなければならない、除去や処理に多くの労力やコストがかかることから、愛媛県のサトイモ栽培に適する生分解性マルチをメーカーと開発・実証中。

収穫時まで
残存



ビニールマルチ



マルチ除去作業

省力化・プラスチック廃棄物の削減



生分解性マルチ



耕うんによるすき込み

回収不要で
省力的！

5 省力栽培技術の開発と乗用農機利用



全体



AIアプリ

かん水
してね

防除
してね



本体



水分センサー



カメラ

